審査の結果の要旨

氏名　筒井　美紀

1990年代以後、無業者の増大など、高卒者の進路保障をめぐる問題が喫緊の課題となっている。高卒就職者への明確な育成方針を持ち、職域が高度化する就職機会へと生徒を就職させようとする積極的な意味での進路保障は、いかにして可能か。本論文は、このような問題意識に立ち、高校から職業への移行に伴う困難な課題を、進路指導に限らず、労働市場の構造的な変化や、企業内での人材育成システムの変化にまで射程を広げて、実証的に解明しようとするものである。

１章では、「積極的進路保障」の概念を提示し、先行研究の批判的検討とマクロ統計による新規高卒就職の変化の分析を通して、その実現をはばむ要因を分析するための問題設定と分析枠組みの提示が行われる。２章では、主にマクロ統計の分析によって、高卒労働市場の閉鎖化の実態が解明される。高学歴代替、中途正規採用代替といった現象に注目し、従来の研究が等閑に付してきた企業規模やジェンダーによる違いを考慮に入れた分析により、中小企業では若年中途正規採用男性による新卒男性の代替が生じていることが解明される。３章では、マクロデータと調査対象地となったある県の統計資料および企業インタビューデータを用いて、間接雇用の増大が、新卒者への代替を大量に引き起こしている事実が詳細に解明される。

４章では企業内部の分業の変化が、高卒採用の縮小に及ぼす影響について、企業の事例研究をもとに明らかとされる。資格（知識）社会化の影響のもとで、製造業技能工へのより高度なスキルの要請とその習得期間の短期化といった、初期キャリアの「急勾配化」が生じており、それが高卒者のキャリアルートを狭めているといった新たな知見が示される。５章では、労働市場及び企業内のキャリアルートの変化がもたらす、高卒者の職域閉鎖化が、進路指導担当教師に認識されない原因を、教師インタビュー調査を用いて分析する。その結果、高校―企業間の「実績関係」への依存が、職域の閉鎖化を見えにくくさせていることが判明する。６章では、各章の知見をまとめ、その理論的、政策的意義について考察する。職域閉鎖化がスキルの習熟の機会を狭め、若年労働市場の流動化を促していること、その事態が進路指導の場面で生かされる情報として企業―高校間のリンケージにのらないことなどが指摘され、その結果、積極的進路保障が阻まれると結論づけている。

以上のように、本論文は、労働市場と企業内部の変化にまで対象を広げ、学校教育にとどまらず、企業内の人材育成との関連から、現代の高卒就職者にとって知識・スキルの習熟とキャリア形成の機会が縮小する仕組みを明らかにし、さらには、この課題に高校の進路指導が応えることが困難になっているメカニズムを解明した点で、今後の教育研究に重要な貢献をなすものと考えられる。このような点から、博士（教育学）の学位論文として十分な水準に達しているものと認められる。